

馬先生とのつかのまの〈出会い〉と〈別れ〉

深澤

徹（外国語学部）

突然の訃報に、驚いている。馬先生は一九四六年の生まれだから、私よりも七つ年上で、ようやく七〇歳を過ぎたばかり。まだまだこれからというのに、あまりにも早く逝ってしまわれた。

とはいえ私が、馬先生と親しく接したのは、ごく最近の二〇一五年春のこと。中国語学科の鈴木陽一氏の肝煎りで、アジア研究センター所長であった秋山憲治氏と、日本常民文化研究所長であった田上繁氏、そして当時、人文研究所長の任にあった私とで、中国は上海、杭州の各大学（上海師範大学、浙江工商大学、浙江大学）を一週間ほどかけて歴訪、今後の神大との学術交流へ向け、布石を打つという趣旨のものであった。その際のお世話役として、馬先生にご同行いただいたのである。

学部時代の第二外国語は中国語を選び、また大学院受験の語学も中国語で受けたので、その受験勉強も兼ね、神田の「日中学院」には二年程も通っていた私だが、とうとう中国語がものにならなかった。そんな語学ベタの私にとって、まさしく、かゆいところにとどく馬先生の、現地での様々のアドバイスは、本当に有難かった。中国語ベラベラの鈴木陽一氏は別にして、これについては、秋山、田上両氏も共通した思いであつたろう。なに

も中国側のスタッフと敵対しているわけでもないのだが、外交交渉よろしく、相手側と接する際の様々な〈知恵〉を授けてくれる馬先生の、まさしく〈参謀〉ともいべき位置づけに、一体どちらの味方なのかとまどうこともしばしばであった。もちろん特別招聘教授のお立場として、当方の強い味方ではあるのだが、馬先生はもう、半分日本人なのかもしれないと思ったりもしたものだ。

いつのことだったか、そんな思いを一層強くしたのは、日中比較文化に関する国際シンポジウムの折に、発題者として日本の詩歌や物語についてお話されていて、へえーそうなんだと驚かされたことがあった。平成一二年に春風文芸出版から刊行された馬先生の『日本文学史』は、A4版九二九頁に及ぶ大冊で、長年の先生の、日本研究の集大成ともいべき主著の位置づけにあるのだろう。異文化を理解する上で、やはり「文学」は基本で、馬先生の日本研究の出発点にも「文学」への興味関心のあったことを知り、日本文学を専門とする私としても、数少ない同好の士を見出したかのように思え、馬先生への親近感が一気に増した。

しかし今から思うと、そのころにはずいぶんと病状も進んでいて、ここ二・三年はつらい中での出勤めだったのではあるまいか。なんの問題意識も抱かず、私が中国語をのんびりと学んでいた学部学生のところは、ちょうどあの「文化大革命」の時期に当たっていて、「黒かろうが白かろうが鼠を捕る猫がいい猫だ」と発言した鄧小平を、そのときの中国語の教師（もちろん中国籍であった）は盛んに批判していたものだが、ご経歴を拝見するに、二〇歳から三〇歳までのその困難な時期を、馬先生はひたすら日本語を学ぶことに費やされていたようだ。だとしたら、ずいぶんと肩身の狭い思いもされ、それがのちのちお身体に影響して、お命を縮める結果になったのではないかと思ったりもするのである。

後悔先に立たずとはよく言ったもので、馬先生とは、日本文学について熱く語る機会を、もっと持ちたかった。神奈川大学にとって、いや日本国にとって、貴重な人材を失った悲痛な思いとともに、ご冥福をお祈りしたく思う。

以上